
「ヒトと野生動物たち、一緒に未来へ。」

-Part 2-

WILDLIFE PHOTOGRAPHER

山田 耕熙

2020年11月



IWC
SCHAFFHAUSEN

ワイルドライフと人間が共存するための手段

(part1からの続き)

ランタンボールとガラパゴスの共通点

ランタンボールの虎もガラパゴスのゾウガメも、もはやヒトの手による保護がなければ生存不可能な状況に陥っているという点では共通点がある。

例えば、世界で最も多く野生の虎が生きるインドにおいてさえ、虎の棲息する森は“分断された森”として点在している現状がある。森が切り拓かれ、道路と都市によって分断されたことにより、虎は森を自由に移動出来なくなったため、限られたエリアの中でのテリトリー争いが激化し、交配にまで影

響が及んでいる。このことは貴重な個体数が直接的に減少することに繋がってしまう。そのため、場合によってはヒトの手で個体の移動が行われない限り、基本的にはテリトリー争いによる虎の怪我や近親交配が進行する状況に陥ってしまう。

(とは言っても、野生の虎を移送するにはまず麻酔銃で眠らせる必要があり、専門家が行ったとしても、麻酔の量のコントロールが非常に難いため、その過程で意図せず命を奪ってしまうケースもある。また新たな保護区へ無事に移送出来たとしても、虎がそのエリアから元のエリアへ戻ろうとする(それはある日突然、野生の虎が街中や道路上に出現することを意味する)という問題点もある。)



また、人口増化の影響で、ヒトの居住する一部のエリアが虎の棲息するエリアと完全に重なっている地域では、ヒトが虎に襲われたりすることが起きるため、その報復で殺される虎もいるのだ。こういった事柄を防ぐには、そもそも虎の生息域とヒトの生活エリアとの間にバッファエリアが保たれることが重要であるのだが、インドのランタンボールでは、専門的な知識を持った人々による努力と、法による取り締まりとがセットになって虎の保護が行われている。例えば報復が起

きないようにするために、政府は、住民や彼らの財産である家畜が虎に襲われた場合には金銭補償をする制度を設けている。また、虎の棲息地に近い地域の住民へは移住するメリットの提示とともにその説得も行なっているのだ。

こういった地道な活動がランタンボールのワイルドライフを支えている。



一方、ガラパゴスのゾウガメにも、野生のままに放置しておくことが出来ない実情がある。

そもそも絶滅の危機に陥っていたゾウガメは、現在ではヒトの手によって保護され、いくつかのブリーディングセンターにおいて数を増やしているのが現状だ。(IWCの企画で訪れたチャールズダーウィン研究所にはそのブリーディングセンターの一つが存在する。)

ゾウガメは卵が孵化する際の砂浜の温度によって、最終的な雄雌の判別がなされる。(温度が低ければ雄になり、高ければ雌になる。)ブリーディングセンターではヒトの手によって温度管理された中でインキュベーションされるため、

雄雌の数がコントロールされている。しかし現状抱える問題としては、温暖化の影響によって砂浜の温度が上がってくると、野生の中で産まれる個体は今後、雌に偏り出すという事だ。つまりは、もはやヒトの手によるコントロールなくしては種の存続は難しいという問題に晒されているのだ。

ダーウィンは自然淘汰という言葉を使って、生物は次第に環境に適応した方向に向かって変化することを見出した。

ガラパゴスの各島の生体、例えばフィンチという同じ種の鳥類であっても、島ごとで食べる餌に合わせてくちばしの大きさが異なるなど、自然淘汰が起きた結果を見ることができる。



19世紀までの間、ゾウガメは食用、あるいは燃料油への用途として大量に乱獲され絶滅の危機に瀕した。そして今もなお、人間が持ち込んだ外来種の脅威に晒されている。



14種ほどいるダーウィンフィンチ。体の大きさはいずれも15センチ程度だが、食性に合わせ各々の種でくちばしの形が多様化している。

IWC
SCHAFFHAUSEN

また、虎は世界の中でユーラシア大陸の東西南北、インドネシア、バリ島にまで分布した生き物だが、寒冷地のヒマラヤ山脈からマングローブが茂る熱帯の湿地まで、その地の環境に適合しながら身体的特徴に差を見出してきた。

そして種の中での生存競争が行われながら、一途に子孫を残してきた。

いずれもダーウィンが言う様に自然淘汰してきた生き物なのだ。



しかし、そんな彼らは今、自然淘汰して行く時間よりも先に、人間との共存という喫緊のテーマに晒されているのだ。ただ、そんな状況下においても、ガラパゴスにもインドのランタンボールにも、“ワイルドライフと人間の共存”を考えるための一つのモデルが見出されていることを肌で感じる事が出来る。

二つの場所で共通することは、複雑な問題を抱えながらではあるが、政府が主導することでツーリズムが一定の規模で成立し、それを主たる収入源としていることだ。そして、そこに

関わる現地の人間の数が多く、世界から注目され、多くの観光客が訪れ、派生する新たな問題へ取り組む研究者が現れている。

両者はそういった枠組みになったことでワイルドライフの継続的な保護活動に繋がっているのだ。繰り返しになるが、観光のための環境整備と観光客自体の増加には新たな問題が伴うことは事実だ。拡大だけではなく法による規制と一定の制限がセットになることが重要であるし、保護のためにはそれらが同時に進められる必要があると考えている。



写真家として、私の活動の目的

私は、ランタンボールとガラパゴスに触れて、生き物たちの賢さと逞しさ、毎日一瞬一瞬行われる命の駆け引き、親が懸命に子を守るその愛の深さなど、様々なドラマを見てきた。それらを見てきて思うことは、彼らも人間と同じく紛れもなく一つの尊い命、我々と対等な存在であるということだ。

私は自分が愛する虎達やガラパゴスの生き物たち、強いては野生動物たちの命が、人間との共存の中で守られていく未来を目指している。

そのために、自分が見てきた瞬間を写真という手段を通じて人に感じてもらい、共感してもらうことが、まず自分に出来ることだと思っている。

なぜならば少なくとも、私自身の実体験として、初めて野生の動物や自然のある世界に行こうと思ったのは、動物たちの美しい姿を記録した写真や映像を見て感動したことがきっかけだったからだ。



私が初めてランタンボールを訪れた時に巡り合ったシーン。息を飲むほどに美しく、夢中で撮影した。一生脳裏に焼きつく瞬間となった。



生後2年が経つ頃までの間、親子、兄弟の間で互いに身を擦り寄せ愛情を表現する。独立後の虎は群れをなすことなく単独で生きていくため、このように家族でいる時間は限られている。

IWC
SCHAFFHAUSEN

だからこそ、ワイルドライフに程遠い意識で生きている現代の多くの人へ、何かを通してその姿に、美しい、素敵だ、自分で見てみたい、面白そう、興味がある、時間をかけてでも行ってみたい、お金を払う価値がありそう、といったシンプルな考え、共感を持ってもらうことが、まずは何よりも重要ではないかと思う。共感こそが最終的に、何かを知ろう、調べよう、これはおかしい、自分に出来ることって何だろう、人に伝え

よう、というアクションに繋がっていく最も重要な最初の入り口ではないかと考えているからだ。

一人でも多くの人に、野生の動物が生きる世界を感じる旅に出かけて欲しい。そのきっかけとなってもらえる様に、私が見て感じた、動物たちの一瞬の表情、命のやりとり、逞しさと儚さ、深い愛と優しさ、そういった部分を伝える写真を撮り続けようと思っている。



生き物は形や見た目、その危険度は違えど、本当にどれもがユニークで、見れば見るほどに尊い。その営みの全てに無駄がなく、そしてただひたすらに美しい。美しく無限に続いてきた命のやり取りが、この先も人間の手によって守られて行くことを願っている。

自分が興味を持って出かけ、自然に触れ、楽しい記憶、素敵な瞬間を自分の目で見れば、人は自ずと自然に対して優しい

気持ちを持つようになると信じている。そして自然に対し優しくなれば、最終的にはそれは人間にとっても優しい環境に繋がるだろう。

そういった想いを持つ人が増えることを信じて、私は写真を撮り続けて行きたい。



見る者が思わず笑顔になる青アシカツオドリの求愛ダンス。足が青いのは餌である青魚の成分色素によるものだ。



喉袋を大きく膨らませることで雌の気を惹く雄のグンカンドリ。長時間の飛翔が可能な鳥で、船で航海をすればいつでも船上を飛んで付いてくる。

コロナパンデミック後も同じ景色を

世界がコロナパンデミックを経験した今、野生の動物が生きるかけがえのない景色を観光資源として成り立ってきた国や地域は、その環境を維持する事が困難な状況に直面しているだろう。観光客を失ったことで経済面は当然のこと、あらゆる“監視の目”が薄れしまっているからだ。(南アフリカの一部では既に犀角を狙った密猟がコロナ禍に乗じて加速してしまっているという報告もある。)更に、不況が生み出す失業者が、新たな密猟者に転じてしまうことも考えられるのだ。このような状況がこのまま長続きすれば、動物たちの生きる環境を維持することが出来なくなる場所がどんどんと現れてくることが想像できる。コロナが終わり人間だけが無事に生き残ったとしても、野生動物たちを失えば、彼らを観光資源として生きてきた人達の不況は終わらない。

だからこそ、5年、10年後の景色を考えた時、そこに生きるかけがえのない存在である動物たちを残していくために、ツーリズムが容易に成立し得ないコロナパンデミックの中でも、プロダクトやサービスの購入を通して動物の保護活動を応

援できるような、継続的な仕組みの展開が、あらゆる分野で広がりを見せることを望んでならない。(そしてもっと言うならば、そのような仕組みはコロナパンデミック後の世界における消費活動のスタンダードになるべきだとも思っている。(とりわけ先進諸国においては!))

世界の歴史において、自然と野生動物たちは、私達人間が大切に長く語り継いできた数々の物語や、生み出されてきた多くのクリエイティビティーにとって、決して欠く事の出来ないインスピレーションの源泉そのものとなってきた。そんな未来に引き継ぐべき本当に大切な地球の財産を守るために、一つの消費活動から確実に還元されていく仕組みが作られることが未来に繋がる希望だと思う。

最も大切なことは、ヒトも野生動物たちも、一緒に、未来へ行くことなのだ。

生き物たちが躍動する美しい世界に、また触れられる日を待ち望んでいる。



IWC
SCHAFFHAUSEN



逞しく躍動する姿からは、彼らが生態系の頂点であるという強い生命力を感じるが、一方で森の中で静かに眠るその姿からは、紛れもなく、彼らが一匹の命であることをも感じさせる。

IWC
SCHAFFHAUSEN

自らの在り方を考える

私がIWCを選び続けるのは、そのブランド哲学が自分のライフスタイルにマッチするからだ。トリビュートトゥガラパゴスモデルの様に、ガラパゴスで生きる生き物や環境をモチーフとしたプロダクトが、象徴であるチャールズダーウィン研究所を支援するというコンセプトは、自分にとって分かりやすく、貢献してみたいと思える自然な話だった。

なぜならば、物が溢れる現代においては、プロダクトの購入を通して新たな学びを得ることや、自分の価値観を写す鏡を持つことが、もはやエンドユーザーの購買動機の一つでもあるからだ。つまり、プロダクトの背景にあるストーリーや、思想、哲学、世界観を共有することに意味を感じているのだ。

これからも、そういった人達は益々増えていくのではないだろうか。

私が追い続ける虎達の様に、絶滅の危機にある野生の生き物たち（レッドリスト^{*1}）を救うことを考えるということは、遠く離れている様に感じる私たち一人一人の日々の生活の在り方を考えることであり、それはつまり、地球環境そのものを考えることと同義だ。近い将来のうちに、レッドリスト達からのメッセージを伝える様な意味を持つモデルがIWCから生まれ、それをたくさんの人達で支援できたなら、そんなに嬉しいことはない。

最後に、忘れないで欲しい。

多くの野生動物たちを絶滅の危機に追い込んできたのは間違いなく私たち人間だ。しかし、彼らを未来に連れていけるのも、唯一私たち人間だけだ。

^{*1} 2020年7月時点で、IUCN（国際自然保護連合）がまとめた絶滅の危機に瀕している世界の野生生物のリスト、いわゆる「レッドリスト」には、実に3万1000種もの野生生物が名を連ねている。



IWC
SCHAFFHAUSEN

「ヒトと野生動物たち、一緒に未来へ。」

-Part 2-

PROFILE OF KŌKI YAMADA

1979年生まれ。東京在住。

旅先で綺麗な写真を撮りたいと思い、2012年頃からカメラに興味を持つようになる。

ある日、BBC Earthのドキュメンタリー番組に圧倒的な衝撃を受け、地球上にある「人間の想像をはるかに超越した世界」に関心を抱く。

それをきっかけに、実際に極地や僻地に行き、自分自身の目で物事を捉えてくることに意味を感じるようになる。

これまで南極、北極、アラスカ、インド、アフリカ、ガラパゴス諸島などへ旅し、さまざまな生き物を撮影。中でも、インドのランタンボール国立公園に生息するロイヤルベンガルタイガーの虜となり、この数年追い続けている。

厳しい環境をその身一つで立ち向かう生き物たちの逞しさ、そして儚く美しい姿、自分が感じたそんな瞬間を、写真を通じて伝えていきたいと思い活動している。

AWARDS

2020年 第8回日経ナショナルジオグラフィック写真賞ネイチャー部門最優秀賞受賞

2018年 第52回キヤノンフォトコンテスト風景部門ブロンズ賞受賞

EXHIBITIONS

2019年4月 富士フィルムフォトサロン東京（東京ミッドタウン六本木）にて、初の個展「ロイヤルベンガルタイガー -フラジャイルな存在-」を開催。

1週間で1万人以上が来場した。

以後、全国3都市大阪・福岡・名古屋にて巡回展を行った。

ATELIER

2021年3月 東京代官山ヒルサイドテラスに自身の写真アトリエ「Atelier Rantham」を開く

「Atelier Rantham」

〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町29-18ヒルサイドテラスA2

E-mail info@kokiyamada.jp

HP <https://kokiyamada.jp>

Instagram https://www.instagram.com/koki_yamada_photography/